

2) ウミガメに関する調査研究

笹井隆秀^{1,2}・真栄田 賢²・芦田裕史²・山崎 啓²・水落夏帆²・荻野寧々²
西口峻平³・中島愛理^{1,4}・植田啓一^{1,4}・小俣万里子⁴・中村美里⁴・高橋沙矢香⁴
前田好美⁵・河津 勲^{1,2}

キーワード：卵黄形成開始年齢 外洋での幼体発見 適正な孵卵温度 古賀賞受賞

1. はじめに

世界中の海洋に広く分布するウミガメ類の生息数は、自然環境の悪化等により近年著しく減少しているとされ、IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストにも全種が掲載されている。ウミガメ類の保全のためには、その生態や個体群動態について、野外および飼育研究を通して把握する必要がある。本事業ではこれらの問題に対応するため、以下の取り組みを実施し、今年度の研究成果として、学术论文7報が受理・掲載され、学会等において9題の発表を実施した。

2. 産卵調査

当財団は沖縄島において、日本ウミガメ協議会および調査ボランティアと連携し、産卵状況の把握に努めている。その中で当財団は沖縄島の北西部に位置する本部半島（本部町、今帰仁村、名護市）等での調査を担っている。令和5年度の本部半島では、アカウミガメおよびアオウミガメの産卵が、各々47回、28回確認された（写真-1）。



写真-1 産卵調査の様子

3. 漂着調査

当財団では、一般の方々からの情報を元に、海岸に死亡漂着するウミガメ類の調査を行っている。本調査では現場に出向き、種の同定、解剖および計測などを行った。令和5年度にはアカウミガメおよび

タイマイ、計15例の死亡漂着を確認した（写真-2）。



写真-2 死亡漂着の様子

4. 回遊調査

本調査では、飼育下で繁殖し、1年間飼育した158個体のアカウミガメ、アオウミガメおよびタイマイの標識放流調査を行い、初期の回遊経路について検証した（写真-3）。また、視認性の高い新規標識タグの開発を日本ウミガメ協議会と共同で実施した。昨年度報告した、八重山諸島の多良間島におけるアオウミガメ交尾の初確認、南大東島沖でのアオウミガメ、沖縄島沖でのタイマイ幼体の発見については、うみがめニュースレターに掲載した。



写真-3 標識放流の様子

¹動物研究室 ²海獣課 ³普及開発課 ⁴附属動物病院 ⁵魚類課

5. 飼育下における調査

沖縄美ら海水族館のウミガメ館では、アカウミガメおよびタイマイの産卵が確認された。また、飼育下におけるアオウミガメの卵黄形成開始時の年齢および体サイズに関する研究（写真-4）を行い、その結果が動物園水族館雑誌に掲載された。さらに、28年間にわたる水族館でのウミガメの繁殖研究に関する活動が評価され、日本動物園水族館協会の「古賀賞」を受賞した（写真-5）。



写真-4 計測の様子



写真-5 古賀賞受賞

ウミガメ類の適正な人工ふ化技術の開発に向けて、飼育下で得られたタイマイの卵を用い、高知大学と共同で、適正な孵卵条件の検討を行った。また、日本ベツ甲協会と共同で、昨年度に開発したセレン高含有のビタミン剤（美らビタミックス）をタイマイへ投与したところ、血中セレン濃度の季節変動を確認したほか、産卵1個体での孵化率上昇を確認した。

6. 健康管理に関する調査

当財団では、衰弱したウミガメ類が漂着した際、緊急保護を行い、検査及び治療にあっている（写真-6, 7）。今年度は10個体のウミガメ類が緊急保護された。また、過去に保護した個体も含め、治療により回復した12個体を放流した。過去に緊急保護したヒメウミガメが誤飲していた釣針を回収した事例が、うみがめニュースレターに掲載された。



写真-6 保護個体のCT検査の様子



写真-7 保護個体の治療の様子

それ以外には、幼体の腸管内寄生虫のリスク評価に関する共同研究を帯広畜産大学と実施し、原虫類の1種の感染により病原性を示すことが明らかとなった。

7. 外部評価委員会コメント

学術成果など結果は申し分ない。しかし、かつての栄養学的なテーマのような統一されたテーマが見つかっていない。新たな研究テーマを模索するには、飼育されたウミガメや砂浜での調査など博物学的な研究を強化する必要がある。それには職員がその職務にあたるほか、ある程度学識をもったボランティアを育て、組織するしかない、検討をいただきたい。（亀崎顧問：岡山理科大学教授）